

# 磁気ヘリシティ入射時における FRC トロイダル流速の分布計測

## Toroidal flow structure in a magnetic helicity injected FRC plasma

郷田みどり<sup>1</sup>, 加藤匡<sup>1</sup>, 佐野光<sup>1</sup>, 山内貴紀<sup>1</sup>, 松本昂大<sup>1</sup>, 高橋努<sup>1</sup>, 浅井朋彦<sup>1</sup>,  
板垣宏知<sup>2</sup>, 神尾修治<sup>2</sup>, 竹村剛一良<sup>2</sup>, 井通暁<sup>2</sup>

Midori Goda<sup>1</sup>, Masashi Kato<sup>1</sup>, Hikaru Sano<sup>1</sup>, Hiroto Itagaki<sup>2</sup>, Tsutomu Takahashi<sup>1</sup>, Tomohiko Asai<sup>1</sup> et al.

1.日大理工 2.東大新領域

1.Nihon University 2.The University of Tokyo

### 1. 序論

磁場反転配位 (Field-reversed configuration: FRC) プラズマにおいて、トロイダルモード数  $n=2$  の断面変形を伴う回転不安定性は配位持続時間に最も大きな影響を与える。FRC に微小なトロイダル磁束を入射し、この不安定性を抑制する目的から、磁化同軸プラズマガン (Magnetized Coaxial Plasma Gun: MCPG) を用いた磁化プラズモイド入射が行われ、不安定性の成長が抑制される様子が観測された。しかし、MCPG を用いた磁化プラズモイド入射では、磁気ヘリシティのほかに、スクレイプオフやコアの電場や圧力分布などを変化させる可能性があるため、今回は、ドップラー分光法を用いた磁化プラズモイド入射時のトロイダル流速観測結果から、回転不安定性の安定化機構を検証する。

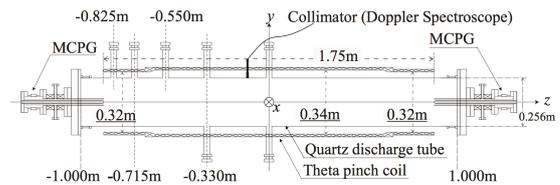


図1 NUCTE-III及びMCPG概略図

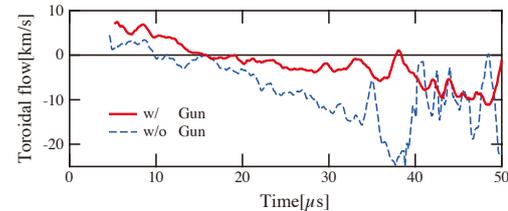


図2 トロイダル流速の時間発展

### 2. 実験装置

本研究は、逆磁場シータピンチ装置 NUCTE (Nihon University Compact Torus Experiment) -III で行った。装置端部にスフェロマック様プラズモイドを生成する MCPG を設置し、有意な磁気ヘリシティを持つ磁化プラズモイド入射を行った。図1にその概略を示す。

### 3. トロイダル流速の時間発展

トロイダル流速計測では、プラズマ中の不純物スペクトルである4価の炭素の輝線 (CV:  $\lambda=227.09$  nm) を選択し、装置中央付近 ( $z=-0.011$  m,  $x=\pm 3.6$  cm) のトロイダル断面において観測を行った。

図2は、トロイダル流速の時間発展である。FRCは、主圧縮磁場が印加されてから、約  $15\mu\text{s}$  で平衡状態に達するが、この前後でトロイダル流は反磁性方向へ反転する。以後、主圧縮磁場印加時刻を  $t=0$  とする。磁化プラズモイドが入射されるとトロイダル流速の時間発展は緩やかになっている。

図3に、断面変形が観測される時刻、及びトロイダル流の平均加速度と磁化プラズモイドが入射される時刻の関係を示した。図中の破線は、典型的な FRC の断面変形が観測される平均時刻 ( $t=37.8\mu\text{s}$ ) である。この結果から、 $t=10\sim 15\mu\text{s}$  に磁化プラズモイドが入射さ

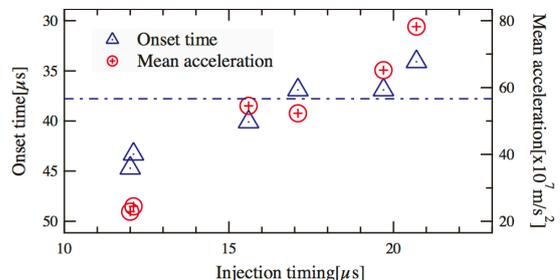


図3 回転不安定性の発現時刻及びトロイダル流の平均加速度と磁化プラズモイド入射時刻の関係

れると、断面変形の発現時刻が遅延する傾向があり、そのときのトロイダル流の平均加速度は低下している。トロイダル流は、 $t=15\mu\text{s}$  前後で反磁性方向へ反転するが、それ以前に磁化プラズモイドを入射した場合のトロイダル流の平均加速度は大きく低下している。

### 4. まとめ

FRC が平衡状態に達する  $t=15\mu\text{s}$  以前に磁化プラズモイドが入射されたトロイダル流速の加速度は低下し、また、そのときの断面変形の発現時刻は遅延していることがわかった。

今後は、装置両端から FRC に対して磁化プラズモイド入射を行うことで、安定化の機構における磁気ヘリシティの影響について検証をすすめる。